

「鳥たちの舞うとき」

高木仁三郎著

作者と重なる闘う主人公

本書は昨年十月に作者が永眠する二カ月前、抗ガン剤も効かなくなった体で集中的に口述された。脱原子力社会の実現をめざし民間の情報施設を立ち上げ、自ら《市民科学者》として専門家の閉鎖的な壁をやぶることに奔走した、そんな彼が、死の宣告を前に最後に選びとった表現手段、それがこの「小説」である。

舞台は、日本全国で展開されるどの大型の公共事業にも共通するであろう豊かな自然をもった『G県天楽谷』。ダム工事が着工されているその谷で、トレーラーやクレイン、掘削機などが崖から落ちるといふ不審な事故があいつぎ、ついに人命まで失われる結果となる。その犯人としてカラスの群れの襲撃が明らかとなり、その教唆、訓練役の首謀者として谷の長が逮捕・起訴される。そこへ作者を彷彿させる市民活動家で、同じくガンの告知を受け余命いくばくもない草野公平があらわれるのだ。彼は鳥と会話する女性摩耶にしたいにひかれ、鳥たちのリーダーであり威厳に満ちた大トンビ、アオラとともに何十万を超す鳥たちの舞いをコンサートの中で成功させ、世界に谷の豊かさを訴える。裁判や生態系の調査報告も進み、事件の真相が解明されるにつれ、関連するいくつかの事故が政争と利権に絡み意図的に仕組まれていたことが見えついで。

「最後の晩餐」はよく聞く。だが人が「最後の表現」をすゝめるとき、何をどのような形で残すのか。連れの女性の「あとがき」に、小説を書くことは作者の長年の夢であり、リタイヤした後の希望であったと記されている。夢と希望の結晶のこの作品が、命と引きかえになるだろうダム問題へ取り組み草野の姿と重なっていく。

作中で突き当たる「いつ死ぬか」という問いの次元を超えた何ものか」は、宮沢賢治を愛読した作者らしい、自分自身の魂と向き合うことでしか開けない、より普遍的な場所からのメッセージを含んでいる。高木仁三郎は確かに、賢治の残した、天に上り燃え尽きた鳥「よだかの星」になったのだと思う。